



雨水タンクによるソーシャルビジネスで すべての人々に安全な水を届ける

～水問題が深刻化する Bangladesh で雨水タンクの普及を推進～



完成した1,000基目の「AMAMIZU」雨水タンクの前で。中央が村瀬さん(写真:村瀬誠)

近年、アジアの途上国では水問題が深刻化しています。必要な量が確保できない、あるいは安全な水にアクセスできないなど、命の源である水にまつわる様々な問題に直面しているのです。東京都の墨田区役所の職員として、またNPO「雨水市民の会」事務局長として、長年にわたり雨水利用に取り組み、「ドクター・スカイウォーター」としても国際的に知られる村瀬誠さんは、水問題に悩む世界の人々のために雨水で何かできないかと考えていました。

区職員の時代は、雨水を溜めて都市型洪水の被害を抑え、溜めた雨水をいかに有効利用すべきかという課題に取り組んでいました。1985年の両国国技館の建設時には雨水を溜めて利用するためのタンクの設置に尽力しました。「雨水は、そのまま下水に流せば洪水に、溜めれば資源になるのです。」と村瀬さんはいいます。

村瀬さんが日本での経験を活かして、水問題で貢献できる国として着目したのが、Bangladesh でした。この国では、多くの人々が日々の生活で池の水を飲み水として使っていますが、塩分や有機物の汚れが混じるなど衛生的に問題が多く、頻繁に下痢に悩まされています。こうした事態を受けてたかさんの井戸が掘られました。ところが、多くの井戸で地下水が有害なヒ素に汚染されていることが分かりました。Bangladesh には、ヒ素を含む地層が分布しており、国内の井戸の3割が汚染されているといわれます。村瀬さんは、とりわけ水問題が深刻な場所を探して、Bangladesh の南西部・バゲルハット県にたどり着き、2000年から活動を開始しました。2010年には(株)天水研究所を設立し、2010年度にコンサルティング会社と組んで、JICAの協力準備調査(BOPビジネス連携促進)に応募して、採択され、Bangladesh における雨水タンク事業の実現に向けた調査を行いました。

「この地では古くから『モトカ』と呼ばれる素焼きの甕に雨水を溜めて飲んできた歴史があります。しかし、最大でも100

リットル程度の容量しかなく、しかも割れやすい。そこで、それよりも容量が大きく割れにくい雨水タンクを製造、販売しようと考えました。」

過去の経験から、雨水利用が盛んなタイの東北部に安価で丈夫なモルタル製の甕があることを知っていた村瀬さんは、この技術をなんとか Bangladesh に持ち込めないかと考えます。そこで、タイに Bangladesh の左官工を派遣して技術を習得させることにしました。

「職人が必要な技術を完全に習得するまでに1年くらいはかかったでしょうか。タイとは使う泥やセメント、砂の質も異なるため、当初は試行錯誤の連続でした。しかし、私はあくまで、人も素材も地元でこだわりました。その方が生産コストを抑えることができ、地元で雇用機会を作り出すことにつながります。」

完成したモルタル製の雨水タンクは容量が1,000リットルで、「AMAMIZU」と名付けられました。そこには、天からの恵みを感じていただくという自然に対する畏敬の気持ちが込められています。2012年、AMAMIZU を200基販売して好調なスタートを切り、2013年には現地法人スカイウォーター・Bangladesh を設立し、600基のAMAMIZU を販売するなど順調に実績を重ねています。JICAの協力準備調査においてタンクの販売価格を3,000タカ(現在1タカは約1.3円)にすれば村人の50パーセントが購入可能であることが明らかになったことから、当初のAMAMIZU の価格を3,000タカに設定、運搬費と雨どいなどの設置費を入れて4,300タカとしました。一人でも多くの人々が購入できるように分割払い方式も取り入れました。

「無償の支援を否定するつもりはありませんが、これからの国際協力事業は、コスト管理の考え方を導入する一方でオーナーシップ(主体的取組)を育み、いかに持続可能な形にしていけるのが鍵だと思います。『地域の産業として根付かせる』という視点がなければ、その場だけ、一時だけの取組で終わってしまうのではないのでしょうか。」と、村瀬さんは「ソーシャルビジネス」として国際協力を続けることに、大きな意義を見いだしています。

「日本はアジアの中で雨水利用の先進国です。日本が雨に恵まれているのは、Bangladesh 方面からモンスーンの風に乗ってやってくる雲のおかげです。日本と Bangladesh の空はつながっています。彼らの抱える水問題は決して他人事ではありません。日本がこの分野で積極的に国際貢献していくことが大切だと考えています。」



地元の素材、地元の人たちによるタンクづくり(地産地消)(写真:村瀬誠)